



Title	『列子』華胥国説話と中井履軒『華胥国物語』
Author(s)	福田, 一也
Citation	懐徳堂研究. 2013, 4, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26936
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『列子』華胥国説話と中井履軒『華胥国物語』

福田一也

一 序言

大阪懷徳堂の第四代学主である中井竹山の弟として生まれた中井履軒は、三十六歳のとき懷徳堂を離れ、私塾水哉館を営む。そして四十八歳（安永九年「一七八〇」）のとき、米屋町（南本町一丁目）の荒廢した借家に移り住み、その一室の入り口に「華胥国門」という額を掲げた¹。華胥国とは、伝説の帝王である黄帝が夢の中で訪れた理想郷であり、『列子』黄帝篇にその説話がみえる。この借家の一室を華胥国に擬えた履軒は、みずから「華胥国王」を名乗る²。華胥国について履軒はかなり思い入れがあるらしく、その名を冠する著書に、本稿で取りあげる『華胥国物語』をはじめ、『華胥国暦』・『華胥嚙語』・『華胥国歌合』などがある。

『華胥国物語』に関して山中浩之氏は、「経世」の書、すなわち世を^{おさ}経める書と位置づけている³。本書は物語という形式をとってはいるが、その中には履軒が理想とする服飾制度をはじめ、教育制度や均田制度、及び新田開発などが盛り込まれており、単なるおとぎ話でないことは明らかである。そして物語中にみえる個別の制度改革については、履軒の経済思想という観点から、既にくつかの論考がある⁴。ただし、例えば均田制に関しては、履軒の著作中に『均田茅議』などの専論もあり、必ずしもこれを物語として提示する必要はない。にもかかわらず、履軒はわざわざかかる形式を用いて持論を展開している。

ここで想起されるのは、華胥国の典拠となっている『列子』の華胥国説話である。『列子』の華胥国と履軒のそれとが如何なる関係にあるのかということは、とても興

味深い問題と思われる。だが意外にも、両者を正面から比較検討するといった研究はこれまで行われていない。それは、両者の提示する華胥国があまり似ていないことにもよるであろう。

履軒の『華胥国物語』を見る限り、その中に『列子』の思想的影響は看取されない。しかしながら、華胥国の所在やそこへ至る方法などに関しては、『華胥国物語』も『列子』のそれを踏襲しており、履軒も一応は『列子』の華胥国説話を踏まえていることが窺われる。とすれば、その描き方にも何らかの影響がみえそうなものだが、両者はこの点に関しても大きな異なりをみせている。『列子』では、完成された理想郷としての華胥国が示される。一方で、履軒の提示する華胥国は、決して完成された理想郷ではない。どこにでも存在しそうな一地方が、理想郷へと変貌するさまを中心に叙述している。思想内容は異なるとしても、履軒も『列子』と同じく、完成体としての華胥国を描くことは可能だったはずである。だが、履軒はそれをしなかった。その異なる描き方にこそ、履軒が本書を通じて伝えようとした真の意図が込められているように思う。

こうした観点に基づき、本稿では、まず『列子』華胥国説話と中井履軒『華胥国物語』について、物語構成の

面から比較分析を行う。そしてその結果をもとに、履軒が『華胥国物語』を著作した意図について考えてみたいと思う。

なお、テキストについては、大阪大学懷徳堂文庫に所蔵される中井履軒『華胥国物語』(手稿本)⁵⁾の影印本を使用することとする。

二 『列子』華胥国説話の内容と分析

『列子』黄帝篇にみえる「華胥国説話」は、①黄帝即位後の治政、②黄帝が夢で訪れた華胥国の様子、③夢から覚めた後の黄帝の治政、以上の三つの場面で構成される。そこで以下、この三段に分けて、その内容をみていくことにしたい。

①黄帝即位後の治政

黄帝即位すること十有五年、天下の己を戴くを喜び、正命を養い、耳目を娛しませ、鼻口に供すも、焦然として肌色は旣黜し、昏然として五情は爽惑す。又十有五年、天下の治らざるを憂え、聡明を竭くし、智力を進め、百姓を営おさむるも、焦然として肌色は旣黜し、昏然として五情は爽惑す。黄帝乃ち喟然とし

て讚じて曰く、「朕の過ちや淫し。一己を養わんとするも其の患いは此の如く、万物を治めんとするも其の患いは此の如し」と。是に於いて万機を放ちて、宮寝に舍し、直侍を去り、鐘懸を徹し、厨膳を減じ、退きて大庭の館に間居し、心を齋し形を服えて、三月政事を親しくせず。

第一段では、黄帝の即位後における治政について述べられる。即位から十五年、黄帝は天下の人々から天子に推戴されたことに得意となり、耳目鼻口などの感覚器官を満足させ、自己の「正命」（性命）を養うことに務めた。これは、一個人の身体を養うという養生思想の実践である。しかしその結果、身体はやつれて肌の色は黒々とし、五官は乱れにみだれるといった有り様となった。また、次の十五年、黄帝は天下が治まらないことを心配し、聡明な耳目や卓越した知力・体力の限りを尽くして民を治めようとした。今度は、自己ではなく、外物（自分以外の他者としての万物）を治めようとしたのである。だが、やはり同様に心身を疲弊させるだけの徒労に終わる。自己を養うことも万物を治めることも過ちであったと悟った黄帝は、全てを止めて宿舎に籠もり、心を清め身を整えることに専念し、三ヶ月の間、政務を放棄する。

②黄帝が夢で訪れた華胥国の様子

昼寝ねて夢み、華胥氏の国に遊ぶ。華胥氏の国は兪州の西・台州の北に在り。斯れ斉国の幾千万里なるかを知らず。蓋し舟車足力の及ぶ所に非ず。神游のみ。

其の国に師長無く、自然のみ。其の民に嗜慾無く、自然のみ。生を樂しむを知らず、死を悪むを知らず。故に夭殤無し。己に親しむを知らず、物を疏んずるを知らず。故に愛憎無し。背逆を知らず、向順を知らず。故に利害無し。都て愛惜する所無く、都て畏忌する所無し。水に入るも溺れず、火に入るも熱けず。斫撻するも傷痛無く、指撻するも瘡癢無し。空に乗ずること実を履むが如く、虚に寝すこと床に処るが若し。雲霧も其の視を破げず。雷霆も其の聴を乱さず。美惡も其の心を滑さず。山谷も其の歩を躓づかしめず。神行のみ。

第二段は、夢の中で黄帝が華胥国を遊行する場面であり、ここではまず華胥国の所在について語られる。華胥国は「兪州の西・台州の北」に位置するが、「斉国（中国）の幾千万里なるかを知らず」とあるように、中華世界とは途方もなく離れているという。そしてその場所は、「蓋

し舟車足力の及ぶ所に非ず」と述べられるように、徒歩はもとより、船や車などの乗り物を駆使しても到達不可能な場所とされる。では、黄帝はどのようにしてこの華胥国に辿り着いたのであるうか。「神游のみ」とあるところからすれば、それは精神による遊行である。すなわち、夢の中で黄帝の精神は肉体を離れて自由となり、幾千里彼方の華胥国に到達したのである。

そして以下では、華胥国の様子が描写される。まず注目すべきは、華胥国の統治体制である。「其の国に師長無く、自然のみ」とあるように、華胥国には「師」や「長」といった区別が存在しない。「師」（先生）が存在しなければ、「徒」（生徒）も存在しないわけであり、これは賢愚の区別がないことを表している。また、「長」が存在しないとは、上下関係がないということであり、これは身分的序列のない社会であることを示している。この状態は「自然のみ」と表現される。すなわち、華胥国の人々は人間が人為的な区別を行う以前の本来的なあり方（「自然」）を保持しているというのである。これと関連して注目されるのが、「華胥氏の国」という表現である。華胥国は、華胥氏が統治する国のようにだが、「華胥の君」や「華胥国王」とは呼ばれず、ただ「華胥氏」とのみ記されている。これは、華胥国には身分の上下が存在しな

いたためであろう。

続けて「其の民に嗜慾無く、自然のみ」と、華胥国の民には欲望が無いことが述べられる。その理由は示されていないが、ここでも「自然のみ」とあることからすると、華胥国の民は利害といった価値判断を行わない素朴で原初的な状態（「自然」）を保持しているため、欲望を持たないのだと思われる。物事の価値判断はもとより、物の区別すら行わないというのは、『莊子』などによくみえる万物斉同の思想である。すなわち、ここで描写されているのは、万物斉同の思想的理想が達成された世界であり、以下でもこの思想が実現された世界としての民の様子が語られる。

「生を楽しむを知らず、死を悪むを知らず」とは、生を好み死を悪むといった価値判断はもとより、生死の区別すら行わないことをいう。したがって、「故に夭殤無し」と、若死に（夭殤）という觀念すら存在しない。以下も同様である。「己に親しむを知らず、物を疏んずるを知らず」と、自己と物（外物）とを区別しないので、自分を愛し物を疎むこともなく、その結果、「故に愛憎無し」という状態に至る。また、「背逆を知らず、向順を知らず。故に利害無し」と、何かに順ったり逆らったりすることがないため、利害の対立も起こらない。万物に区別を設

けない万物斉同の境地に立てば、「都て愛惜する所無く、都て畏忌する所無し」とあるように、何かに対して「愛惜・「畏忌」することはなくなるのである。

以上は、齊物論的な思考がもたらす精神世界の有り様であったが、以下では、それが身体的にも常人離れた能力を発揮することが述べられる。

「水に入るも溺れず、火に入るも熱けず」と、華胥国の民は水火をものともせず、また「斫撻するも傷痛無く、指撻するも瘡癢無し」とあるように、切ったり（斫撻）引つ掻いたり（指撻）しても傷つくことはない。「空に乗ずること実を履むが如く、虚に寝すこと床に処るが若し」と、空中を歩き回ったり、虚空に横たわることも可能であり、「山谷も其の歩を躡づかしめず」と、峻険な山谷も歩行の邪魔とはならない。さらに、「雲霧も其の視を破げず。雷霆も其の聴を乱さず」のように、「雲霧」や「雷霆」でもその視力や聴力を妨げることはできず、「美悪」にも「其の心を滑さ」れることはない。「神行のみ」とあるように、まさに華胥国の人々は、神業的な身体能力を有するのである。

要するに第二段では、万物斉同の境地が達成された世界としての民の様子が描かれているといえよう。

③ 夢から覚めた後の黄帝の治政

黄帝既に寤め、怡然として自得す。天老・力牧・太山稽を召し、之に告げて曰く、「朕は間居すること三月。心を齋し形を服え、以て身を養い物を治むるの道有らんことを思ふも、其の術を獲ず。疲れて睡り、夢みる所は此の若し。今、至道の情を以て求むるべからざるを知る。朕は之を知る。朕は之を得。而れども以て若しに告ぐる能わず」と。又た二十有八年、天下大いに治まり、幾んど華胥氏の国の若し。而して帝は登假す。百姓は之を号して、二百余年輟めず。

第三段は、夢から覚めた後の黄帝の様子と、その後の顛末が述べられる。夢で華胥国を遊行した黄帝は、「怡然として自得す」とあるように、喜んだ顔つきで自ら悟る（自得）ところがあった。そこで、天老・力牧・太山稽の三大臣を召し、事の経緯を告げる。「朕は間居すること三月。心を齋し形を服え、以て身を養い物を治むるの道有らんことを思ふも、其の術を獲ず」と、黄帝は三ヶ月にも及ぶ閑居や齋戒でも、自己や万物を治める方法は得られなかったとする。そしてその後に疲れて眠り、夢で偶然にも華胥国に至り、そこで至治の世ともいうべ

き理想郷を目の当たりにした。そこで黄帝は大いに悟るところがあったものの、「而れども以て若に告ぐること能わず」とあるように、その秘訣は言葉では伝えることができないという。「自得す」とあるように、自ら悟る以外にその秘訣を知ることが不可能だと述べるのである。

第一段において、黄帝は自己の修養、万物の統治のいずれの実践にも失敗する。そこで今度は身を清めて精神を統一し、思索によって至治の術を得ようとするが、これも思うような効果が得られない。すなわち、至治の術は、具体的な方法の実践や精神的思索によって得られるものではなく、ただ「自得」するよりほかはないのである。したがって、その術を他者に言葉で伝達することも不可能であり、これを得ようと思えば、臣下の側もまた「自得」する以外にない。至治の術は言葉では決して伝達できない、これこそが本説話において作者が最も強調する点であったと思われる。

黄帝が夢から覚めた後の二十八年間、天下は太平でそれはまさに華胥国のようにであったという。そして黄帝が崩御すると、民はその統治を慕って号泣し、その涙は二百年もの間続いたという。これは、単に黄帝の治政を称えるだけでなく、黄帝が「自得」した至治の術が臣下に

は継承されず、もとの混乱状態に逆戻りしてしまったことを暗示している。

三 『華胥国物語』の内容と分析

次に『華胥国物語』の内容についてみてみよう。本書では、冒頭に華胥国の所在に関する簡単な説明が行われた後、すぐに華胥国の様子が語られる。そして、本物語の主人公である黄子梁の登場によって、一連の物語が展開していくのである。便宜上、以下では四段にわけて、その内容をみていくことにしたい。

① 華胥国の所在とその統治体制

華胥てふ國は、雲井のいづこともさだめがたき國土のやうにいひつたふれど、またく通路なきにしもあらずかし。むかし、夢窓法師、禪定のついでに、折々はゆきかよひけらし。その物がたりとて、人のかたりける。

あやし其國ぶりの、しきしまや、やまとの國にかはりたるやうのすくなき。その國都に王宮ありて、よもに國郡をわかちて、おの／＼つかさ／＼あんなる。南の海邊に、南柯てふ郡あり。その郡守なん、めざ

ましき人にぞありける。

『華胥国物語』では、その冒頭において華胥国の所在について言及する。華胥国は、遙か彼方の国のように言い伝えられてはいるが、全く通路が無いわけではなく、昔、夢窓法師が何度か通ったことがあるという。「禪定のついで」とあることから、それは禪定による精神統一によって無念無想の境地に達し、その際に精神が遊行して遙か彼方の華胥国に到達したものと思われる。そして、「その物がたりとて、人のかたりける」とあるように、以下、夢窓法師の体験を語り継いだものとして、本物語は幕を開ける。ここで日本人にもなじみの深い夢窓法師を登場させるのは、華胥国が全く架空の場所ではなく、確かにこの世に実在する場所であると根拠づけるためである。また、夢窓法師が禅僧である点も、精神の往来以外に到達不可能な華胥国を訪問する人物として適任だったと思われる。

続けて華胥国は、不思議なことに敷島や大和、すなわち日本とあまり変わりのない風土であるとされる。国の中央には王宮があり、四方は郡に別れていて、それぞれ役人（郡守）がこれを統治している。その南には南柯という郡があり、すばらしき郡守がいたという。その人物

が、本物語の主人公となる黄子梁（第三段に「郡守黄子梁」とその名がみえる）である。

ここで注目されるのは、華胥国の風土が日本とさほど変わりのないものとされている点である。『列子』の中で黄帝が遊んだ華胥国は、中華世界から遠く離れているとしても、やはり、その一部としてイメージされることであろう。主人公の郡守は、下文によると黄子梁という中国風の姓名を名乗っており、この点は日本的ではない。しかし、以下では、江戸時代の参勤交代を彷彿させる都との往來の制度も看取され、さらに、中央の王都に住む国王をあたかも我が国の天皇のごとく「すべらみこと」と称する箇所もあり、確かに日本（特に江戸時代の日本）との親近性を感じさせる。

『華胥国物語』では、このように華胥国全体の統治者である国王、及び四方の郡を管轄する郡守などの為政者が存在する。『列子』では前述のごとく、「華胥氏」は存在するが、彼は君主や国王などとは呼ばれていない。そもそも『列子』の華胥国には身分的序列がないため、国王などの為政者も存在しないのである。一方の『華胥国物語』では、国王や郡守といった身分が厳然と存在しており、それはあたかも江戸時代の將軍と大名との関係を想起させる。ただし、先述のように、国王が「すべらみ

こと」と呼ばれていることからすると、本物語は、將軍ではなく天皇を中心とした社会となっているといえる。

②南柯郡の窮状と黄子梁の対処

「めざましき人」と評される郡守の黄子梁は、決して特別な人ではない。南柯郡の郡守の子として都で生まれ、何不自由なく育ったが、二十歳になるころに父が世を去り、急遽その後を継いで郡守となった。そしてその時はじめて彼は、南柯郡の財政がもうどうにも立ちゆかないほど窮乏していることを知る。

まづよねぐらは、雨もりの水たまりで、いをなんおひいづべく、さらにもなし、こがねしろがねのくらは、まぐさやうのものをとりいれて、とびらばかりいかめしううちしたためたり。

米倉には雨漏りの水が溜まって魚が住みそうなほどであり、黄金・白銀の蔵には秣のようなものが敷き詰められているだけで中身はなく、扉だけが厳めしく設えられている。不思議に思った黄子梁は、その理由を役人に尋ねる。

年々のおほやけごとをはじめて、かうのとの、のほりくんだり、または都にてほどくのまじらひ、被官ずさのはぐ、みまで、いかばかりかは。

役人がいうには、毎年の租税をはじめ、都への往来や都における交際費、役人への俸禄など、多額の出費によって財政は逼迫しており、民の食料としての米を取り立ててもなお足らず、王都の富商に金を借りて急場をしのいでいるが、その借金は年々増える一方であるという。思いもしない所領地の窮状を耳にした黄子梁は、「そのとりはたる民くさは、なにをもて日をすぐすや」と、民の生活について尋ねる。役人が答えているには、「山にいらて、いもところくづのねなどほりて、露の命をつなぎ、牛馬のやうに、わらをしきて、その上にうづくまりて夜をあかす」と、民は芋・ところ・葛の根などの粗末な食料で露命をつなぎ、牛馬のごとく藁の上で夜を明かす状態だという。聞くに堪えず黄子梁は涙を落とし、「およそくにの守たらんものは、そのくにたみをはぐ、むよりまさりたるおほやけごとやはある」と述べ、自分も民と労苦を共にすべく、食事は芋・ところを交え、就寝の際には布団の上に藁を敷いて寝るのであった。

さらに黄子梁は、「この郡のさだまりたるみつぎのよ

ねは、十萬俵ありけらし。來年よりは、五万俵さ、げさせよ」と、役人を召して年貢の徴収を半分に減らすよう命じる。そして、「おほくの民にかはりて、われひとりうえこゝえて死なんに、なんでふことやある」と、たとえ自分の身にかえても民を救おうと誓うのである。

③国王の恩情と財政の回復

明年の春、王都に参勤した黄子梁は、南柯郡の窮状を国王に報告する。

臣子梁先祖の勳功によりて、おほくの所領をたびぬれど、いふかひなき身にて、民まどしく、うえつこゝえつ、其くるしみ大かたならず。(中略) ふしてねがはくば、臣のつかさくらるをうばひたまひて、白衣にて職を領せしめたまへ。さらば、いかにもして、民をすくひおさめて、すべらみことのおほんめぐみを、あほ海のきしまでしきほどこしてたてまつらん。

南柯郡の財政難は郡守たる自分の責任だとし、黄子梁は自身の官位を剥奪した上で所領地を治めさせてほしいと述べる。そしてそれが叶えば、どんなことをしてでも、すべらみことの恩徳を海に至るまで敷き及ぼす所存であ

ると申し添える。国王は大いに驚き、「こはいかに」と問うと、黄子梁は次のように続ける。

つかさくらある身は、のぼりくだるにも、従者のやうまで式あり。都にありふるにも、よろづ式をそむくことかたくなむ。みつぎを半ゆるしはてたれば、何をもて所の式をまもりえんや。これひとえに君のおほんめぐみにて、おほくの民をすくひたまはむため、臣一人を罪なひたまへかし。

官位をもつ身では、都へ参勤する際にも細かな格式が定められており、それに違反することは許されない。しかしながら、領民の年貢を半分に減じたため、もはやそれを守る費用もない。官位剥奪の要請は、財政上の問題を考慮してのことでもあったのである。黄子梁の申し出に深く感じ入った国王は涙を流し、「さてはたぐいすくなき心ばえにこそ。さらばよろづ心のまゝにふるまはせなむ。つかさくらるは、うばふまでもなし」とその心意氣を誉め、官位はもとのままとして自由に振る舞わせる。そして、諸々の役人に対して次のように宣旨を下す。

南柯の郡、年なみよろしからず。民まどしくとて、

郡守黄子梁、儉をまもり、式をくだすべくなん、ねがひのまゝにゆるしはてぬ。諸子のともがら、うけたまはりて、式もてながめそ：

国王は南柯郡の窮状に理解を示すとともに、黄子梁の節儉を称え、諸役人に諸々の規定を免除するよう通達する。黄子梁はその恩情に感激し、勅書を片手にすぐさま帰国の途につく。それを見送る臣下たちも、「ただありがたの御心ばえや、かたじけなのみことのりや」と、国王の寛大な処置に対して、ただただ感謝の念を述べる。すなわち、ここでは民を思いやる黄子梁とともに、慈悲深い処置を行った国王も名君として称えられているといえる。

帰国した黄子梁は、五万俵を役人の俸禄として分かち与え、さらに宝蔵に残る宝の品々を借金返済のため商人に与える。この行為に驚いた商人たちは、以後、利息は取らず、預かった宝も返済が完了するまで売らずにおこうと心に決め、「かみは神なり」といって、みな黄子梁を尊崇したという。

こうした節儉政策の効果もあり、南柯郡の財政は「かのおほんめぐみにて、いまかくゆたけき世となりて、倉によねみたぬ家もなく、ふくらかにあたゝかなるきぬふ

すまきぬ民もなし」というほど回復をみせる。役人は民に対し、年貢はできる範囲でよいと告げるものの、民は規定以上に収めようとし、七年の後には華胥国で最も栄えるほどになったという。商人への返済も終えた黄子梁は、都にのぼって国王に近況を報告すると、国王はこれを喜んで位を二等上げ、みずから恩賞として烏合の弓を授ける。こうして「民はおほくさゝぐるを幸いにし、つかさ人はすくなくをさむるを職とおもへり」というほど、役人と民との上下関係も良好となり、ここに理想国としての華胥国が誕生するのである。

④黄子梁が実施した諸制度改革

以下では、黄子梁が実施した種々の制度改革が紹介される。

大刀ひとふりさげはきたり。たときは、こがねづくり、次はしろがね、その次、武士はくろがね、文吏はあかゝね。庶人は木もて大刀のかたをけづりて、鏝さへなくて、鏝ばかりしろがねあかゝねをゆるされたり。

まず帯刀に関しては、貴人(黄金製・白銀製)・武士(鉄

製)・文吏(銅製)・庶人(木製)と、身分の序列に応じ
て異なる材質を用いることが示される。物語の冒頭部分
では、国王―郡守―民という三つの序列が看取されたが、
ここでは貴人・武士・文吏・庶人という四つの序列が設
けられている。「すべらみこと」とも呼ばれる華胥国の
国王、及び郡守黄子梁は、この内訳によると貴人(貴族)
に属すと思われるが、注目されるのは、その下位に武士
が位置づけられている点である。華胥国は日本と似た風
土とされていたが、決して武士を中心とする社会ではな
い。それは華胥国の人々の髪型にも表れている。華胥国
の人々は、「すべてかしらに池ほることなく、うまれの
ま、の髪をたかくとりあげて、末を、舟に帆をあげたら
んやうに折りまげて、かうむりはなし」と、武士の象徴
たる月代は剃らず、みな総髪姿であるとされているので
ある。

以上の施策は、「これらもむかしはさらぬを、みなこ
の郡守のしいで、」と、黄子梁の発案とされ、「後々は
國中にひろまりて、おほやけの式とぞなれにける」と、
その後は国全体に広まってゆき、華胥国の正式な制度と
なったという。そして、「すべてこの人のしをけること」
もの、よにかたりつたへまほしきことのいとおほかる」
として、以下、黄子梁が行った教育制度や均田制度、及

び新田開発などの事業が紹介される。

教育に関して黄子梁は、僧を還俗させて周囲の子供に
読み書きを教え、併せて「孝弟廉恥」などの儒教的徳目
を学ばせるようにした。また、素直で農作業を熟知した
老人も、同様に若者の教育に従事させ、その結果、子供
たちは「おのづから心まめしくな」り、争いごとくも絶え
てなくなったという。さらに、賢い子供は、村↓里↓国
府の学館へと進学して最終的には官吏となり、また還俗
して教育を担当した僧たちも、その教育上の功績によつ
て同じく村↓里↓国府の学館へと進み、博士となって栄
えたとされる。

さらに、黄子梁が郡守となった当初から実施してい
たとされるのが、次の均田制である。これは一人一町以上
の田地の所有を禁じ、すべての民が自分の田地をもてる
ようにするもので、この制度の実施以後は田地が均等に
行き渡り、その結果、「おなじつらなるかまどの煙、お
とりまさりなく、うらやむ心もなく、なげく袖もあらで、
ひとつ心にたのしき世をわたりける」という具合に、民
の貧富の差は解消され、他者を羨むことも己を卑下する
こともない楽しき世が到来したという。

そして最後に紹介されるのが、新田の開発である。国
府の東は荒地となっていたが、そこに低地から吸水可能

な「龍尾車」を導入して水を引き、兵士を労働力として荒地の開墾を行う。その仔細は省略するが、「かくてみとせすぎぬれば、あら田よくなりぬ。今よりはろくはたまふまじ」と、三年後には新田が完成し、そこからの収穫により、兵士への俸禄は必要なくなったという。同様に、国府の北にある沢も「龍尾車」の活躍で良田となり、西も南もこれを行うことで、これに従事した兵士の禄は不要となり、軍事教練も廃止されるに至ったことが記される。

そして一連の黄子梁の施策が語られた後、「なほか、るたぐひのさま／＼にといふ／＼」と、黄子梁の行った事業はまだまだあるとされるが、ここで「鳥がねに夢はさめにけり」と、鳥の鳴き声に夢は覚め、本物語は幕を閉じることとなる。

四 『列子』華胥国説話と履軒

『華胥国物語』との比較分析

これまでの内容考察をもとに、物語構成などに着目しながら、両者を比較分析してみよう。

まず『列子』華胥国説話は、夢以前→夢の中→夢以後という三つの場面で構成される。これに対して『華胥国

物語』は、冒頭の華胥国に関するプロローグ的な説明部分を除けば、ほぼ全体が夢の中の話で占められる。

次に華胥国の所在について、『列子』では「弁州の西・台州の北」と明示されるものの、それは中華世界から幾千里の彼方にあり、ただ精神の遊行のみ到達可能な場所とされる。『華胥国物語』でも「雲井のいづこともさだめがたき國土のやうにいひつたふ」として、遙か彼方の場所とする点で一致し、さらに、夢窓法師が禪定のおりに通っていたとするなど、『列子』と同じく精神の遊行によってのみ到達可能な場所とされる。「夢窓法師」を登場させる点などには違いも見えるが、これは前述のごとく日本の読者を意識してのことであり、その所在に関して両者は基本的に一致するといつてよからう。

では、両者が提示する華胥国の統治体制についてはどうであろうか。『列子』の華胥国には、「其の国に師長無く、自然のみ」とあったように身分の上下がない。したがって、そこに君主や臣下などの序列もないので、ただ「華胥氏（の国）」とのみ呼ばれている。一方、『華胥国物語』では、身分の上下は厳然として存在する。中央の王都に住む国王、四方の郡を治める郡守、そして庶民。すなわち、ここには少なくとも「国王」―「郡守」―「民」という三つの序列が看取される。さらに、後に黄子梁が

実施した帯刀制度では、貴人―武士―文吏―庶人という四段階の身分的序列もみえている。そしてその頂点に立つ国王は、「すべらみこと」とも呼ばれており、日本の天皇にも似た存在である。西村天囚は、その著書『懷徳堂考』の中で、「履軒は固より封建論を取りしも、其の封建は覇府専制の封建に非ずして、王者の封建なりき」と、履軒の理想とする封建体制が「覇府」（武士政権）による封建制ではなく、「王者」（天皇）による封建制であると指摘する。そして、「常に礼樂征伐天子より出んことを願ひて、王政の復古を夢みしかあらぬか」（同）と、履軒は天皇中心の王政を夢見ていたと推測している。『華胥国物語』の華胥国は日本と変わりない風土とされているように、履軒がこの物語を通して語ろうとしているのは、日本のあるべきあり方である。そして、履軒が指向するのは、西村天囚が指摘するように、天皇を中心とする社会であったといえる。

続けて、両者が描写する華胥国の実情についてみてみよう。『列子』では、「其の民に嗜慾無く、自然のみ」と、華胥国の民は欲望をもたないとされる。加えて、生死や自他も区別しないので、愛憎などの感情もまたない。これは先に検討したように、万物の区別や価値判断を行わない万物斉同の境地がもたらす精神世界である。そして

それは精神のみならず、肉体的にも超人的な力を發揮するとされ、『列子』中の華胥国の人々は、水火をもとせず、虚空を闊歩する。すなわちそこは、万物斉同の思想に基づく理想が既に貫徹された世界なのである。このように『列子』では、完成された理想郷として華胥国が描かれているのであり、この点は履軒の華胥国との比較の上で極めて重要である。また、『列子』の華胥国には、その中で活躍する主人公のような人物は登場せず、ただ民の様子が淡々と描かれる。このように『列子』の華胥国には物語展開が全くない点も、『華胥国物語』との差違として注目される。

それではこの点に関して、『華胥国物語』の側はどうであろうか。『華胥国物語』では、『列子』とは異なり、華胥国内で一つの物語が展開する。『列子』では静止していた時間が、『華胥国物語』では動き出すのである。主人公は、華胥国の一地方である南柯郡の若き郡守として登場し、以降、この人物を中心に話が展開する。黄子梁は都育ちの世間知らずであり、決して特別な人ではない。父の死により俄に郡守となるが、彼はどこにでもいそうな青年に過ぎないのである。だが、所領地の窮状を知った黄子梁は、これまでの何不自由な生活を一変させ、民と労苦を分かちつくべく、自分も民と同じ質素な生活

を始める。そして、年貢の半減や宝物を借金返済にあてるなど、数々の救済政策も断行していく。彼は特別な能力をもった人物ではなかったが、民の生活を第一に考える点においては、「めざましき人」であった。自分の官位を放棄してでも民を救済しようする黄子梁に国王は心を打たれ、諸々の規定を免除するなどの寛大な処置を行う。自己を犠牲にしても民に尽くす領主黄子梁、その心情を汲んで柔軟に対処する国王、ここにはいずれも履軒の理想とする君主像が投影されているといえる。

山中浩之氏は、本物語における黄子梁の一連の行動を「為政者徳治論」と評している。為政者の民に対する愛情（徳）が世を変えるところといった本書の内容は、思想的には確かに「徳治」といえる要素を含むものであり、万物斉同を説く『列子』の思想とは大きく異なっている。ただし、『華胥国物語』においても、『列子』と同じく完成された理想郷、すなわち「徳治」が行き届いた理想世界としての華胥国を描くことは十分可能だったはずである。しかし履軒の叙述の中心は、民の労苦を少しでも軽減しようとする新米領主の姿であり、その誠意に感化され変わりゆく人々の姿であった。履軒にとって重要だったのは、完成した理想郷ではなく、理想郷へと変貌を遂げる過程であったことが、『列子』との比較を通す

とよくみえてくる。履軒が提示しようとしたのは、到達可能な理想郷であり、そこへ至るまでの方策であった。

後半に示される黄子梁が実施した種々の制度改革は、履軒が生きた当時の窮状を打開するための改革案にほかならない。その中で示される均田制などは、これを専門に論じた『均田茅議』などの著作も存在する。単にその方策を示すのみならば、わざわざ『華胥国物語』のような物語形式でこれを提示する必要はなかったであろう。しかし、ただその方策を示すのみでは、読み手にその効果を実感させることは困難である。そこを物語という仮想空間によつて、ある方策が社会を変えていく過程を描き、その有効性を読者に認識させるとともに、それが十分に達成可能な方法であることを明示しようとしたものと思われる。

五 啓蒙書としての『華胥国物語』

『列子』華胥国説話は、華胥国という理想郷そのものを示すことに目的があるのではない。その理想郷を実現する方法が決して言葉で伝えられず、自ら体得することしか修得できないことを示す点に主眼がある。したがって、至治へといったる過程が記されることもなく、た

だその完成体としての理想郷が描かれるのみで、そこから先は個々の認識に委ねられる。これに対して履軒の『華胥国物語』は、完成形としての理想郷よりも、そこへ至る過程を示すことに主眼が置かれている。舞台となつてゐる南柯郡は、当初は貧困に喘ぐ一地方にすぎず、これは履軒が生きた当時のどこにでも存在しうる光景である。そして、そこに改革者として登場する黄子梁も、いたつて普通の青年であり、決して特別な人ではない。しかし、領民の窮状を考へてひたむきに行動する様に人々は心を打たれ、それは御上をも動かし、最後には南柯郡はもとより、華胥国全体を理想郷へと導いていく。履軒は『列子』の思想を継承しないまでも、『列子』と同じく、己の理想を込めた完成形としての理想郷を描くことは可能だつたはずである。だが履軒は、それよりも理想郷に至る過程を中心に描いた。どんな為政者でも、民を思う気持さえあれば理想郷は実現しうることを、本書を通じて伝えようとしたのであろう。

こうした観点に基づき、再度物語を見渡すと、履軒が主人公の黄子梁を一地方の郡守という設定で登場させたことにも、一定の意味があるように思える。何度も言うように、彼は別段特筆すべきところもない、普通の人物である。だが、民を救済せんとの一心で行つた種々の改

革は、一地方の南柯郡にとどまらず、「後々は國中にひるまりて、おほやけの式とぞなれにける」とあるように、華胥国全体に波及していく。すなわち、地方が中央を動かしたのであり、これは地方からの改革にほかならない。履軒の生きた幕藩体制下における地方とは、全国各地の諸藩を指すであろう。さらに、都育ちの青年黄子梁は、参勤交代の制により人質として都で暮らす諸藩の子息たちと重なる。将来において、地方からの改革を行う担い手は彼らにほかならない。また、彼らはその若さゆへ、旧来の慣習や規則に対しても比較的自由であり、新たな方策を敢行するに十分な可能性を秘めている。履軒が本物語を単なる夢物語ではなく、経世の書として著したことは疑いない。そしてそこには、次世代を担う藩主の子弟を啓蒙し、地方からの改革を促すという意図が込められていたのではなからうか。

本稿では、『列子』華胥国説話との比較を中心に考察を行つたため、履軒の提示する諸政策が『草茅危言』などにみえる兄竹山のそれと如何なる関係にあるのかなど、個別の問題については十分な検討を加えることができなかった。この点は、今後の課題としておきたい。

注

- (1) 現在、この「華胥国門」扁額は、大阪大学懷徳堂文庫に保存されている。
- (2) 本稿で検討する『華胥国物語』中にも、「国王」と呼ばれる華胥国王が登場する。ただしこの「国王」は、「すべらみこと」とも呼ばれるなど、日本の天皇を模したものであり、履軒自身を指しているとは考えがたい。そこで本稿では、履軒が「華胥国王」を自称したことは切り離して本書の「国王」を論ずることとする。
- (3) 山中浩之「華胥国王履軒」(懷徳堂・友の会『懷徳堂復刻叢書』、一九九〇年)。また、湯浅邦弘編『懷徳堂事典』(大阪大学出版会、二〇〇一年)「華胥国物語」の項においても、同様に本書を「経世の書」と位置づけている。
- (4) 田辺元生「懷徳堂学派の経済思想」(日本経済史研究所『経済史研究』第二〇巻第四号、一九四一年)
- (5) 懷徳堂文庫本『華胥国物語』(大阪大学懷徳堂文庫復刻刊行会、一九九〇年)
- (6) 『莊子』齊物論篇に、「以て未だ始めより物有らずと為す者有り。至れり尽くせり、以て加うべからず。其の次は、以て物有りとすも未だ始めより封有らずと為す。其の次は、以て封有りとすも未だ始めより是非有らずと為す」とあり、齊物論の要諦が示される。すなわち、物という認識すら行わない境地が最上であり、その次は「封」(物の区別)はないとする境地、その次は是非などの価値判断を行わない境地がよいとされる。価値判断は、物の区別によって発生するのであり、物という認識すら行わなければ、この世のすべて(万物)は齊しいものとなるというのが、万物斉同の思想である。
- (7) 同様の描写は、『莊子』などにも見える。『莊子』逍遙遊篇では、藐姑射山の神人について、「大浸天に稽るも溺れず、大旱に金石流れ、土石焦げるも熱けず」とあり、また大宗師篇には、古の真人を評して「然るが若き者は、高きに登るも慄れず、水に入るも濡れず、火に入るも熱けず」という。こうした思考は『史記』秦始皇本紀に、「盧生始帝に説いて曰く、」として、「真人は水に入るも濡れず、火に入るも熱けず」とみえており、盧生などの神仙説に影響を与えることとなった。
- (8) 履軒が提唱する田地制度に関しては、田辺氏前掲書(注4)に考察があるので参照されたい。
- (9) 西村時彦「懷徳堂考」(下巻)「履軒慨世と隠居」の項(財団法人懷徳堂記念会、一九二五年)。西村天因は、その根拠となる資料を明示していないものの、本物語のかかる一文もその念頭にあったものと思われる。
- (10) 山中氏前掲書(注3参照)